

道

德

# 目 次

○ 基本的な考え方 .....	489
-----------------	-----

○ 目 標 .....	490
-------------	-----

## 1 基本的な考え方

人間は本来、人間としてよりよく生きたいという願いを持っている。この願いの実現を目指して生きていくところに自分自身を含めた周囲との様々なかかわりが必要となり、ここに道徳が生まれ育ってくる。道徳教育は、人間が本来持っているこのような願いや、よりよい生き方を求めて実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動である。道徳性とは、いわゆる人間らしいよさといえるもので人格の基盤をなすものであり、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲および態度等があり、これらは自分自身や他の人、また自然や崇高なものおよび集団や社会等とのかかわりの中で育っていくものである。

人々は、よりよく生きていく中で夢や希望を持ち、喜び・悲しみ・苦しみ等を経験してたくましく成長し、他の人との心の交流を深め互いに尊敬し合うことで強く生きることができる。また自然との日々の触れ合いによって、様々な思考や感情を発展させ豊かな心を形成し、美しいものや崇高なものとのかかわりを通して、人間としての在り方や生き方を自覚していくことができるのである。さらに、独自の規範や価値観を持つ様々な社会集団とのかかわりの中で、自分なりに価値観を形成するとともに、自分の役割や責任を自覚してともに成長するのである。道徳教育はこのようなかかわりを深めることを通して、社会の一員として望ましい道徳性を育成していくものであり、このことが「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間を育てる」ことにつながり、それはとりもなおさず人間社会の秩序を保ち明るい平和な社会を築いていくことにつながると考える。このことは、精神発達遅滞児の教育においても同様であり、毎日の学校生活はもちろんのこと、進んで社会生活に参加し社会の一員として生きていくために、様々なかかわりを拡大、深化させる中で道徳性の育成を図ることが大切であることは当然である。

このように児童生徒が道徳性を身に付けていく過程は、様々な人やものとのかかわりの中で築きあげられていくことが考えられるが、今回の改訂では、そのかかわりを4つの視点に分類・整理して内容の再構成について次のように図っている。

- ① 「主として自分自身に関すること」として、自己の在り方を自分自身とのかかわりにおいてとらえ、個人の自律性を育てることを大切にする。
- ② 「主として他の人とのかかわりに関すること」として、自己を他の人とのかかわりの中でとらえ他の人とのかかわりを通して望ましい人間関係の育成を図る。
- ③ 「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」として、自己を自然や美しいもの・崇高なものとのかかわりにおいてとらえ、身近な自然に触れながらあるいは動植物とやさしく接しながら自然の中で道徳性を育み、特に人間尊重の精神と生命への畏敬の念を育てることを重視する。
- ④ 「主として集団や社会とのかかわりに関すること」として、自己を様々な社会集団や郷土国家、国際社会とのかかわりの中でとらえ、自分の属する集団や社会における自らの役割と責任を自覚し、愛情を持ってそれらの集団にかかわっていかうとする態度を育てる。

本校の児童生徒の実態をみると、美しいもの崇高なものへの感動体験や、自然の美しさや身近な動植物に親しむ機会に乏しく、ほとんどの児童生徒が生命の尊さに気付いたり、いたわったりする気持ちを持ったりするまでにいたっていない。小学部の児童は、低学年においては自己中心性が強く道徳的判断を親や教師など周囲に依存する傾向が強い。また、中学年になると学校での規則正しい生活や友達との遊びを通して自己をコントロールすることや、相手の立場

を考える傾向が現われてくる児童も見られるが、自己中心的行動が依然として多い。高学年になると自分で判断して行動する力が徐々に身についてくるが、道徳的判断は他に依存することが多い。さらに、中・高等部の生徒たちは、集団の一員として行動したり行動しようという意識はあるもののその中で相手の立場や周囲の人々のことに配慮した行動や、道徳的な判断などは不十分である。またこの時期は、体格が大きくなるとともに親への反抗的言動が見られたり、第二性徴が現われたりなど、子供から大人への移行期であり、身体的精神的に大きく変容する時期であると同時に、一人通学や現場実習等の経験により生活範囲が広がり、交通機関の利用や買物等において社会生活上のマナーや道徳的判断に基づく行動が要求される時期である。生徒のなかには規則を守り、自分の役割を果たし率先して奉仕的活動に取り組んでいる生徒もいるが、指示により行動する生徒がほとんどである。加えて異性に対する関心や、性的成熟の過程から発生するさまざまな問題も起こりやすく、正しい異性観など性に関する道徳的心情や判断力を育てることを必要とされる時期である。このように本校の児童生徒は知的発達の遅れから社会性や情緒に問題のある場合が多く、他律的な行動や自己中心的な行動が目立ち、なかには道徳性の培われる基盤となる基本的生活習慣の確立にも大きな課題を残しているのが現状である。このような児童生徒に対する道徳の指導は、児童生徒の特性等、他教科、領域の内容と道徳の指導内容項目との関連を考慮すれば、特設された時間の中での指導よりも学校の教育活動全体の中で具体的・即時的に指導していく方が効果的であると考え。

そこで本校では、学習指導要領に示された道徳の目標を踏まえ、実態や発達段階に応じて小学部（低－14項目、中－18項目、高－22項目）、中・高等部22項目の中から具体的指導内容を精選する。そしてそれらを日常生活の指導、生活単元学習、作業学習、各教科、特別活動等すべての指導計画のなかに適切に盛り込まれるよう関連内容として明示し、すべての教育活動の中で実際場面に即して指導していくことにする。なお、実際の指導においては、かかわりあいの豊かな子供を育てるという視点からも、次のようなことを念頭において指導していきたい。

- ① 道徳性育成や豊かなかかわりあいの基盤となる「基本的欲求の充足」「基本的生活習慣の確立」に努める。
- ② 自分の生活や周囲に目を向けさせ、美しいものやより正しいものを求めようとする心や生命を尊重する心を育て、道徳的心情にゆさぶりをかけ、それを豊かにしていく。
- ③ 教師と児童生徒および児童生徒相互の豊かな人間関係を大切にし、さらに深める。
- ④ 学級・学校の雰囲気、健康・安全への配慮、家庭や地域社会との連携などよりよい環境づくりに努める。
- ⑤ 具体的な場面で、児童生徒の実態に即して繰り返し指導し、道徳的実践力を育成する。

## 2 目 標

- 全教育活動を通して、日常生活における望ましい生活習慣や人間関係の育成に関する指導の充実を図り、健康で明るく、助け合いながら社会の一員として生きていることを喜び、共に伸びていこうとする人間性豊かな児童生徒を育成する。